



発達心理学への道程で



ウインザー大学 名誉教授

小橋川 慧 (こばしがわ あきら)

1963年、アイオワ大学 (Ph.D.)。琉球大学助教授、ミシガン州立大学客員教授、ウインザー大学教授を歴任。写真は Vanderbilt Kennedy Center の副長・Dr. Jan Rosemergy と研究所内のケネディ大統領のブロンズ像の前で。

人の発達の方向を決める要因として、バンデューラ (Bandura, A.) は「偶然の出会い」を重視した。今回は、私の発達心理学への興味の芽生えを振り返りながら、その途上で出会った人たちについて語りたい。

苦労した児童心理学

1955年9月、当時大学院生選抜によく使われていたミラー・アナロジーテストを受けて、私は心理学専攻としてピーボディ教育大学の大学院に進んだ。児童心理学のクラスでは、岡本夏木氏が「その分厚さと、紙質の輝きに」驚いたという (63号) *Carmichael's manual of child psychology* から、いくつかのチャプターが「必読」として課された。問題は、加齢とともに発達指標が変化するといったデータが満載されているチャプターをいくら読んでみても何も記憶に残らないことだった。「データがあれば十分」という傾向の強い参考図書は退屈だった。

クラスは無意味だったわけではない。「お奨め」といういくつかの文献は後に、私の研究の弾みになった。オウムなど「おしゃべり鳥」に言葉を教える実験の報告書で、模倣行動やフロイトの同一化の始まりを、古典的条件づけで説明するマウラー (Mowrer, O.H.) 説はその一つ。いま一つは、後年批判されたが、文化人類学者ミード (Mead, M.) の三つの未開社会にみられる男性・女性の情緒的特質が、文化的要因に規定されてい

るとした著書だ。ハル (Hull, C.) の論文「社会科学の基礎法則」やエリクソン (Erikson, E.) の「八つの発達課題」はよく利用した。最も有意義だったのは、クラス担当のグレー (Gray, S.) 教授との出会いだった。

「君がパイオニアだ」

一方、若い助教授キャンター (Cantor, G.) が熱を入れて講義した「学習理論」の授業からは、強い感銘を受けた。「必読論文」の数は多かったが、「科学哲学」の論文やハルの「行動の原理」などをがむしゃらに読んだ。

キャンターとの出会いは、私の将来の方針を決める重要なきっかけになった。1年次の仲間らとどの分野を専門にするかを話していた時のこと。「児童心理学をどう思う。あまり刺激的な研究がないけど」と言った私に、偶然それを聞いたキャンターは、「よい研究がないなら、その分野に進んだらどうだ。何をやっても君がパイオニアだ」とコメントした。冗談だったのかもしれないが、繰り返し考える言葉になった。

死に体の児童発達心理学

児童発達研究は「刺激的でない」という私の印象は、特に的外れなものではない。環境心理学の創始者ともいわれているバーカー (Barker, R.) は1951年の *Annual Review of Psychology* で、児童心理学者の理論に対する無関心さを指摘し、研究は質・量ともに低下しており、児童心理学は消滅しつ

つある (dying)、と結んでいる。52年度の評者も、バーカーの結論を繰り返した。

児童心理学の教育は、「実践・応用」を重視した児童研究所や家政学科で主に行われてきた。その結果、心理学科の外部にいた児童心理学者は、心理学の理論や調査法に疎かった。

第2次大戦中、「子どもを研究しても戦争には勝てぬ」ということで、研究費が大幅に削減され、児童を対象にした多くの調査が継続できなくなった。また、児童心理学者も戦時中は臨床心理学者として働き、戦後もその仕事を継続した。このような理由で、戦後アメリカの児童研究数が減少した。

一方アイオワ児童福祉研究所では、戦時中、学習理論とフロイトの概念を合併させて社会的学習理論を提唱した、シアーズ (Sears, R.) が所長だった。また、ナチスのユダヤ人への迫害を逃れてアメリカに亡命していたクルト・レヴィン (Lewin, K.) を、正教授として迎えている。レヴィンの有名な「リーダーシップの類型の実験」で「リーダー役」を務めた大学院生にマッキヤンドレス (McCandless, B.) がいた。彼は、このような教育を背景に、1951年に所長としてアイオワに戻ると、児童心理学を活性化する目的で、実験心理学、実験計画、科学哲学などを必修にした Ph.D. プログラム「実験児童心理学」を設立した。キャンターはこのプログラムで育った。マッ

キャンドレスの学生仲間には、フェスティンガー、エスカロナ、リップットらが出た。

アイオワとの不思議な縁

修士論文「外人学生の学業成績の予見変数」を書き終えた時点で、国際教育研究所から「米国で学んだことを帰国して実践しなさい」と書かれた手紙が来た。研究・開発に重点をおく米国のリサーチ・ユニバーシティでは、ほぼ全員の大学院生に助手の仕事が与えられ、生活をするのに十分な給料が支払われる。この重要な情報を得て、1956年8月、米国に「I shall return」と言って沖縄に帰った。

沖縄に帰った私は、東江康治・平之兄弟がいる琉球大学教育学部の非常勤講師として採用された。後に琉大の学長になった康治氏はアイオワ大学で教育心理の修士号を取得した。マッキャンドレスが推薦した本だと言って、マッセン(Mussen, P.)とコンガー(Conger, J.)による *Child Development and Personality* を貸してくれた。学習理論とフロイトの概念が組み合わされているこのテキストブックを読んで、発達への興味は強くなった。1995年、沖縄で開催された日本心理学会大会の準備委員長を務めた弟・平之氏もアイオワ大心理学科卒、アイオワ大のブラウン(Brown, J.)とウイスコンシン大のハーロー(Harlow, H.)の「動因論争」の話をして「学問の最前線を至近距離で目撃した」と自慢した。ハルの論文「社会科学の基礎法則」の話をするると喜んで聞いてくれた。

私の修士論文をホブス(Hobbs, N.)指導教官も学生仲間も良い研究だという。しかし私には、理論的枠組みがあり、博士論文へとつながる研究テーマで修士論文を書けなかった、という不満

があった。そんな折、デンバー大学のブラウン(Brown, D.)の性役割選択の研究が目にとまった。このテーマはミードの「三つの未開発社会の研究」やマウラーの同一化・模倣についての仮説にも関連する。そのうえ、当時、どの児童心理学のテキストの事項索引にも「同一化」「性役割」「性の型づけ」がない。これからの分野だと調査に励んだ。

私の性役割選択の研究がブシコロギアに掲載されると、デンバーのブラウンから「コピーをアイオワ児童福祉研究所のハータップ(Hartup, W.)に送りなさい」という信じられない手紙が来た。こうしてアイオワとの文通が始まり、大学院、助手職への応募となった。小さな論文も英語で書くと効果が出る。カリフォルニア大児童発達研究所のジョーンズ(Jones, H.)所長からも、同一化の研究は彼のところでも始まっている、と助手の非公式オファーがあった。

結局、1960年9月、アイオワ児童福祉研究所「児童発達」プログラムの助手の仕事を選んで再渡米した。当時の新任助教授の給料は年収6000～6500ドル、私の給料3000ドルは助手の身分では良いほうに属した。

出会った人たち

ピーボディーで：ピーボディー大学でのキャンターとの出会いも、指導教授ホブスとの出会いも偶然だった。キャンターからは、物理学のような客観性のある理論の構成を試みたハルの学習理論を学んだ。一方ホブスの心理療法の講義では、ロジャース(Rogers, C.)の命題「人はそれぞれの体験と知覚をもとに行動し、知覚したことがそれぞれの人にとっての真実である」を学んだ。早々に、心理学には根本的な差異を感じる理

論があることを知った。

ホブスは1948年に、心理学者の遵守すべき倫理規定をアメリカ心理学会(APA)に提案した人。彼はまた、54年、精神発達遅滞児についての専門家を養成するアメリカ最初のPh.D.プログラムをピーボディーの心理学科に設置している。

児童心理学者のグレーは私同様、「同一化」の研究をしていた関係で文通が続いた。間もなく彼女が低所得家族の黒人幼児の学習環境を多面的に整えるEarly Training Projectを開始したのを知った。このプロジェクトは1965年に始まる全米的ヘッドスタート教育のモデルになっている。ホブスとグレーらの研究を基礎に65年にピーボディーにケネディー・人間発達研究所が創設された。現在Vanderbilt Kennedy Centerとして、バンダビルト大学の20学科を代表する200人近い研究者がそれぞれの知識を公益に応用する学際的な研究所へと発展している。偶然出会った二人のビジョナリー(先見の明のある人)の推薦状で私はアイオワ児童福祉研究所へと進んだ。

アイオワで：マッキャンドレスは外国との契約でアイオワ大学には不在で、学生時代には彼には会えなかった。驚きまた嬉しかったのは、キャンターがピーボディーからアイオワに准教授として戻っていたことだった。

研究所所長代理・スパイカー(Spiker, C.)の科学哲学をもとにした児童研究方法のクラスは刺激的だった。私はウインザー大学で学習の実験をしたが、その背景にはスパイカーの「児童の学習」のクラスがあった。1980年代、「学習の方略」を子どもに教える研究が始まったが、これを最初にしたのがスパイカーだ。1960年、対連合

学習を促進するために子どもらにイメージを使うことを教えている。

心理学では、ローゼンバウム (Rosenbaum, M.) 准教授が「観察学習」の実験を行っていた。開放的な人で「代理性強化という概念は心理学に必要なか」「モデルよりも観察者のほうが有利になる学習場面は」など、彼のオフィスでも廊下でも話し合えた。キャンター、スパイカー、ローゼンバウム、それに心理学のファーバー (Farber, I.E.) は私の博士論文審査員を務めた。

アイオワで最も影響を受けたのは指導教授ハータップ (Hartup, W.) だった。彼はオハイオ州立大学で修士課程を終えた後、ハーバードに移ってロバート・シアーズらの有名な“Patterns of Child Rearing” 研究に助手として参加している。1955年、アイオワ大学で親子関係の調査から友人関係の研究を始め、ミネソタ児童発達研究所に移り、退官するまでこの研究を継続。「重要な認知、社会性は、人間関係をコンテクストにして発達する」と言い切っている。発達心理学への顕著な貢献者に贈られるAPAのG.S.Hall (APA初代会長) 賞を92年に受けた。

児童の観察法、論文の書き方、変数指向の実験が支配的なときに「発達」という枠組みを忘れないようにと言われたことなど、彼からは多くを学んだ。子どもが依存的か自立のかと問うよりも、依存性と自立性を二つの異なった次元として考えたほうがよいと教わった。男性役割選択と女性役割選択を二つの異なった次元として概念化したのは発達研究者ではハータップが最初だろう。この手法は観察法とともに琉大で行った「モデルの効果」の実験で活用した。

ハータップの「人格研究への実

験的接近」という新しい手法は沖縄で既に知っていた。50年代の幼児の人格特性の研究は、幼児の行動と母親の育児法との相関関係から推測するのが中心だった。ハータップは、大人の「養護性」(子どもに注意を向け、承認を与えること) を操作して、それが幼児の依存行動に及ぼす効果を実験的に検討している。そのころ、私は模倣・同一化の先行条件とされていたモデルの養護性の影響を実験的に検討してみたいと思っていた。それで、養護性の操作を試みたハータップには特に関心をもった。

ハータップに会ってモデルの養護性と模倣行動の実験について話した。話を聞いていたハータップに、「君はすべての学習は模倣の結果だと思うか」と尋ねられ、突然の質問の意図を考えていると、「君がそう言わないと、誰かほかの人がそう言うよ」と続けた。「誰ですか、その人は」と言う私の問いに「バンデューラ」という答えが返ってきた。早速、スタンフォード大学のバンデューラに研究の抜刷り依頼の葉書を送った。

バンデューラからは小包が送られてきた。抜刷り1部のほかに前刷りが4、5部も出てきた。従来の研究の模倣とは、「モデルと同じ左(右)の箱を選ぶ」といった単純な「場所の選択」だった。バンデューラの実験は、場所の選択だけでなく、モデルの歩き方、言葉使い、服装と、模倣のターゲットを広げてユニークだ。複数のモデルを用いたものもある。論文を読んで「全ての学習は模倣だ」と言いたくなった。ある日偶然、「数年前まで、バンデューラもあなたと同じようにこの図書館を出たり入ったりしていたのよ」とアイオワ心理学科図書館員に教えられた。アイオワの大先輩からは、沖縄に帰

ってからも前刷りが送られてきた。

ミネソタで：モデルの成功・失敗を、観察者があたかも自分が成功・失敗したかのように反応するのを「同一化」の例といえよう。私はこの「代理的情緒反応」をモデルの養護性を操作して吟味した。この実験を終え、1963年9月、スティブソン (Stevenson, H.W.) 所長が59年以来再建したミネソタ大学児童研究所にポスト・ドクとして移った。スペイン理論一色のアイオワでは学べなかったピアジェ流の実験をしていたチャールスワース (Charlesworth, W.)、モスクワ大学への留学体験を持つピック (Pick, H.)、コーネル大学のギブソン (Gibson, E.) のところで知覚学習を研究したアン・ピック (Pick, A.)、これからは認知心理学だと言ったライト (Wright, J.) らとの出会いによって、発達の研究に多様性の重要性を痛感した。

スティブソンはスタンフォード大学のヒルガード (Hilgard, E.) の指導で、偶発学習の発達の研究をして51年にPh.D.を取得した。彼は「学習能力は単一概念か」という問いを発達の吟味し始めたところだった(この問いは他の概念、依存性や自己中心性についても発することができ)。彼はその後、ミネソタ児童研究所からミシガン大学に移って、児童の学習成果に及ぼす文化、学校、家庭の影響を世界的視野で吟味して、APAのG.S. Hall賞を始め多くの賞を学会から受けている。

ミネソタで偶然出会った大学院生ローレン・ハリス (Harris, L.) に、4年後、ミシガン州立大学に招かれることになる。今回は、バーカーにネガティブな評価を受けた発達心理学のその後50年の展開を概観したい。